

No.143

# 公民館だより

平成23年11月

宮津市字由良  
由良の里センター内  
由良地区公民館

## キズつく列島

由良地区公民館長 枝川 隆 亮

三月十一日、東日本大震災発生から半年を経過した。

福島第一原発事故で撒き散らされた放射性物質や溶け落ちた燃料の処理が大問題となっている。核燃料のごみ処理は非常に大変である。十万年後までの安全を考えなければならない。

放射能が低い防護服・手袋類はドラム缶に入れモルタルで覆って地上の浅いところに埋め三百年間管理する。人が近づけない使用済み核燃料から発生する「高レベル放射能廃棄物」は放射能が半減するには、高いものでなんと百万年以上かかる

言われている。日本の計画では地下三百メートルより深く数平方キロの範囲に総延長二百キロトンネルを掘り処分し閉じ込めるのが最も良いとされる。

日本は地殻変動の激しいところであり、断層がずれると動き壊れて海水が入るかもしれない。また、地殻の隆起や海面が低下して露出するかもしれない。色々な不安が出てくる。

廃炉して二〇一九年に廃棄物埋設が始る予定になっているが、埋設地として手を挙げる自治体は現在の所現れていない。

放射能が高く住み慣れた我が家に帰れず、いまだに避難所生活を余儀なくされている人々、除染が進まず農作業ができない方々。察するのに余りある。

一九七〇年代に本格化した我が国の原子力発電は、これから「廃炉の時代に入る」と言われている。放射性廃棄物の処理方法を決めないで出発した重いツケがこれから長く国民に重くのしかかる。

九月上旬の台風十二号、中旬の十五号はいずれも自転車が走る速度より遅く、勢力が強いため、雨が長く降り続き被害が拡大した。

この影響で全国的に降水量が多く、特に奈良・和歌山県では七十二時間に千〜千六百ミリという記録的な大雨となりこれは東京都の一年分の降水量に匹敵する量となった。

西日本で四十七万人に避難指示勧告が出された。二十余人の死亡、行方不明者は六十人を越えている。

猛烈な降水のため土砂災害や河川の氾濫が相次いだ。数多くの家屋が流出し道路の寸断などで捜索救助活動が難航した。

また山崩れのため河川をせき止めダム湖ができ夕立ぐらいの雨で決壊の恐れがあり甚大な被害が予想されたが、ダムから水があふれ出す「越流」に終わり大きな二次災害が出ていないのは幸いであった。

台風被害では、平成十六年の二十三号が印象に残るが、近年では、千八百十四年（文化十一年）由良ヶ嶽中腹長尾峠の長尾地区三十余軒が山津波・大洪水で潰れ死者十八名が出て由良地区・栗田地区に分かれて離村したと言ひ伝えられている。

今まで甚大な被害に遭わなかったとは言え、災害は何時やってくるか分からない。全国的に被害が出たこの台風を教訓とし、「普段の備え」をしなければと考えた。

# 行事報告

主事 磯田 充 亮

## ◎六月十九日(日)

### グラウンドゴルフ大会(個人戦)

今年も八十歳代から小学生までの幅広い年齢層の方、男子十六名女子十三名が参加、六班に分かれ八ホールを二周し、合計打数で順位を競いました。

特に、女子の部、新宮さんが昨年に続き連続優勝をされました。

### 【成績】(敬称略)

男子優勝：三嶋 安夫(40打)

女子優勝：新宮さち枝(52打)

ホールインワン：5回(延5名)

最多打数：74打

(他の成績は「公民館がいどでお知らせ済み」)

## ◎七月十日(日)

### 四部対抗バレーボール大会

猛暑が続く中参加者一三七名により盛大に開催されました。体育館内の気温も33℃に上昇し、風もなく、熱中症の心配さ

れる大会となりました。

今年も女子の部で三部が圧勝し21連覇を達成しました。リーグ戦で男子は接戦となり二・三・四部が二勝一敗となり各セットの負け数が少ない四部が優勝し二・三部は選手九人によるジャイケンで順位を決めました。

この大会の試合模様や結果について、毎日新聞、朝日新聞に掲載されました。

### 【試合結果】

男子の部	女子の部
優勝 四部	優勝 三部
準優勝 二部	準優勝 四部
三位 三部	三位 一部
四位 一部	四位 二部

## ◎八月十四日(日)

### 四部対抗ソフトボール

本大会は帰省されている皆様と親交を深めるため開催されています。

当日はグラウンドで最高36℃

を観測、猛暑の中五十八名の選手(女子三名を含む)が参加、優勝めざし熱戦が繰り広げられました。各部選手が若がり好守、強打の連続した試合となりました。優勝戦は五年連続優勝の一部を制した三部が二部と対戦、三部が三回の裏猛打で13点を得点12対21×で三部が優勝しました。

### 【試合結果】

優勝 三部	三位 一部
準優勝 二部	四位 四部

## ◎八月二十一日(日)

### 盆おどり大会(地藏盆)

今年には京都府北部に大雨警報が発令される中、子供地藏盆世話人会、由良おどり保存会等の皆様のご協力を得て開催することができました。今年には浴衣姿のご婦人、子供達が多く参加され、櫓を囲み「えいへいや」等を踊る人達の輪が昨年にくらべ一廻り大きくなりました。今後とも伝統文化の保存と継承にご協

力下さい。

## ◎九月二十五日(日)

### 由良地区運動会

今年には小学校等からの要請で第四日曜日に変更し、小学校、幼稚園と合同による運動会を開催いたしました。

開会式前に雨に見舞われましたが、後は涼しい秋晴れとなり絶好の運動会日和になりました。今年には「皆が楽しめる運動会」を合言葉に、開会式に校歌の斉唱を加え、出場区分の年令の変更やデカパンリレーを廃止借り物競走に変更しました。

今回は三部がマラソンで高得点をとりながら追加点が少なく昨年に続き総合成績の順位は最後の四部対抗リレーに持込み、結果各種目で得点を重ねた二部が総合優勝をしました。結果は次のとおりです。

### 総合成績 リレー成績

優勝 二部(205点)	四部
準優勝 三部(190点)	二部
三位 四部(189点)	一部
四位 一部(187点)	三部

# 私の小さかったころのパートII

由良小学校 教頭 公庄 晴美

私が生まれた昭和三十年代、初めてテレビが我が家にやってきました。福知山の広小路の御霊さんという公園にテレビが

置かれ、放映されているのを見に行ったこともあります。冷蔵庫が家に初めてきたときのことでも覚えています。粉のジュースを買ってもらって、それを水に溶かしたものを冷たくして飲んだのがとってもうれしかったです。

電化製品のの一つ一つが増えることで、幸せの階段をのぼっていくように感じる事ができた時代でもありました。

また、夏になるとどこからかおじさんがアイスクャンデーを自転車の後ろに積んで、「アイスクャンデー、アイスクャンデー！」と売りに来られた光景も思い出します。毎日、朝から晩まで工場の中で汗びっしょ

りで働いている父母に、それを「買って！」ということが申し訳なく思えて、言えずに我慢したものでした。

現在の国道九号線ができるまでは、家の前の細い道(旧道)をバスが通りました。自動車が通るといふ交通量も、はるかに少なかったのです。たまに通るバスに「バスがきた！バスがきた！」とはしゃいでいました。そして、宣伝カーがちらしなどをまいていくのを後ろから必死で追いかけて拾ったこともありました。

初夏には、今では、考えられないほどの数の蛍が、川の岸に広がる草原に、ぼおっといっせいに光を放ち、それはとても美しく見事な光景を見せていました。

夜は、蚊帳をつるし、その中で眠りました。クーラーなどな

いし、真夏の夜は暑かったに違いないのですが、父母と一緒に寝た思い出が懐かしいです。

また、我が家の風呂は、生糸製造の仕事をすることから繭をお湯で煮るためのボイラーがありましたので、夜は、そのボイラーの余熱で、お湯を沸かして入りました。

地藏盆には、親類の人たちが家に来てくれてごちそうを食べるという、きょうだいのない私にとつて一年中で一番うれしい行事がありました。その時のごちそうと言えば、暑い中でのすき焼き。すき焼きが最上級のごちそうでした。今でもその名残で、毎年の地藏盆には「すき焼き風煮」をかかしません。

夏休みには、海へ行くのが、大きな楽しみの一つでした。毎シーズンとはいきませんでしたが、古いアルバムには母と一緒に婦人会で海水浴に行ったときの記念写真が残っています。

こうして、書いていくと、現在の私たちの生活は、本当に豊

かになったことがわかります。

東日本大震災の新聞記事で、「人のあたたかさを感じる事ができました。この震災も悪いことばかりではなかったように思います。今の日本も捨てたものではないと思えました。」という一文がありました。

物の豊かさとの豊かさは、たして正比例しているかと考える時、「衣食足りて礼節を知る」ということわざが浮かびます。店頭には物があふれんばかりにあり、お金さえ出せばだいたいの物が手に入る今の豊かな時代に、本当にこの礼節を大切にしているかということ、いつも振り返り襟を正したいと思うのです。

どんなときも相手の立場に立って物事を考えることのできる自分でありたいです。



## 最後の楽しかった 運動会

六年 岡本遥菜

九月二十五日の運動会は、私の小学生最後の運動会でした。そして、自分なりに一つ一つやりとげる事ができました。

徒競争もしよう害物競争も、しんけんにとっても必死になってやりました。しよう害物で一位になった時は、ガッツポーズしました。それほどうれしかったです。

浜の子ソーランは、一番練習をがんばってきました。練習を始めたばかりの時は、スピードについていくのが大変でそしてはく力を出すのも大変で足がカチカチになる日がつづきました。

でも、最初は大変だったけど何回もやっている内になれて、はく力を出す事ができてきて、運動会でも、大きく体を動かしてやりました。しんけんにやっただけであまり覚えていないけ

ど楽しくやり終えました。

その後の親子競技でもお父さんと息をあわせてやりました。

とても笑える楽しい競技でした。

リレーでも地区のでも負けてしまったけど六年最後の運動会楽しい思い出にのこる運動会でした。地いきの人も、とっても楽しそうに盛り上がってよかったです。

## 真けんにがんばった 運動会

六年 小林美香

九月二十五日の日曜日に、由良地区の運動会がありました。

私は、前期会長なので開会式の時あいさつをしなくてはいいけません。だから、すごくドキドキしていました。一言一言がひびいて、いいにくかったです。きんちようしてドキドキしていたけどがんばって言えて良かったです。

これまで、色々とがんばって

練習をしてきました。走る練習おどる練習など一つ一つ真けんがんばることを目標として私は取り組みました。

私は、目標を守るようにがんばりました。私がとくにがんばったのは、はまの子ソーランと全校リレーです。どちらとも練習よりも上手にできたし、早く走れました。

私が、心に残っているのは、四部対抗リレー、団体の玉いれです。どちらとも三位でしたが、私は、真けんがんばれたので良かったです。玉いれは、楽しんでできました。

私たちの一部は、四位でさい下位だったけど、楽しめたとし、真けんがんばれて良かったです。

これからも、この真けんを忘れずに何でもがんばりたいです。



## 小学校最後の運動会

六年 中西夕紀

九月二十五日に、由良地区運動会がありました。わたしは、楽しみで、運動会が、とっても待ちどおしかったです。

いよいよ、開会式で、ラジオ体操でした。わたしは、前に出たのですが、少しはずかしかったけど、がんばってしました。

次に、徒競争でした。わたしは、二番か三番に入りたかったのですが、がんばって、二番に入れました。とってもうれしかったです。

次に、障害物競走でした。わたしは、ハードルをとんでくぐっては、うまくいって、じゃんけんの所で、負けてばかりでした。とってもやさしかったです。

次に、ザルひきに出ました。うまく引けてよかったです。

次に、浜の子ソーランでした。わたしは、とってもきんちようして、うまくおどれるか心

配でした。

「どっこいしょ。」

の所や、

「ソーラン、ソーラン。」

の所で、しっかり大きな声で言えました。最後のタワーも、うまくできてよかったです。練習よりも、しっかりできたし、百五十点になってよかったです。

次に、PTA親子競技でした。

私は、人数が少なかったもので、二回走りました。一回目は、お兄ちゃんとしました。二人三脚でした。しっかりこげずにできてよかったです。二回目は、お父さんとしました。うまくできました。またやってみたいです。

次に、全員リレーでした。みんな、うまくバトンをわたせていてよかったです。でも、一位になれなかってくやしかったです。最後に、四部対抗リレーで、二人の人をぬけてよかったです。四部が一位になって、とってもうれしかったです。

最後の運動会を楽しめてよかったです。

## 最後の運動会

六年 濱野 颯人

九月二十五日は、由良地区運動会がありました。

まずは開会式をしました。その時、六年生は、前で体操をしました。

初めの競技は徒競走で、ぼくは、六年の中で一組目一レーンでした。少しいやだったけど、ぼく、溪心君、夕紀ちゃん、美香ちゃんの四人で走り、ぼくは三位で、とってもくやししいし、残念でした。

その後はお姉ちゃんのマラソンでした。お姉ちゃんは、初め女子の中では、スタートが良かったです。そして、五分ちよつとくらいで三位で、かえって来ました。さすが速いと思いました。

そしてぼくは、玉入れに出ました。がんばったけど、一個か

二個しか、入らなくて残念でした。点を見ると、浜野路は六十二点でだんとつ一位でした。

幼稚園のケロケロケロクは、かわいかったです。

お母さん、お父さん、おぼさんが出るむかで競争は、三人とも、すぐくがんばって、息がよく合っていました。でも、おしくも二位でした。

ぼくは、次に障害物競走に出ました。ハードルをくぐる所でおくれました。でも、じゃんけんの時一回負けたけど、二回目勝って逆転一位になれてよかったです。

そしてぼくは、すぐざる引きでした。スタートで少しつまって、最下位になってしまいました。ぼくの番がきて、集中しました。一回もミスせずにいけて良かったです。でも結果は、一位と一周も差が出て、負けました。すぐくやしかったです。

大縄とびは、お父さんがまわし、お姉ちゃんが飛びました。

一位と、一点差で二位でした。綱引きは、予選突破できました。

そして、とうとう浜の子ソーランでした。一ヶ月練習しました。ぼくは、タワーが一番楽しみでした。ぼくは、土台なので、がちりしてないと、いけません。本番の時、よしき君は、言ったとおり、勢いよく乗ってくれて、かっこよくきまって良かったです。

そして、お弁当でした。いっぱい食べました。おいしかったです。

次は、お母さんが出た、ボール送り、とても上手でした。

親子競技は、とても楽しみでした。ぼくは、お母さんと出て、アンカーでした。始めの二人三脚は、練習の成果もあり、とても息ぴったりで速かったです。そして、あめは、お母さんが探し出して、くれました。そして、残りの距離の、おんぶは、初めとゴールの所で、ぼくが、お母さんを、おんぶしました。おもしろかったです。

そして、綱引きの決勝は、一部に負けて、くやしかったです。

そして、一番楽しみだった、三色対抗リレーです。ぼくは、アンカーで、となりは溪心君、夕紀ちゃんです。二位になって、ぼくの所に来ました。最後の力をふりしぼったけど、溪心君をぬく事ができませんでした。くやしかったです。

そして、最後の四部対抗リレーは、小学生は、溪心君とあいなちゃんです。ぼくは、出れなくて、残念だけど、二人を応援しました。順位が入れかわったりしながら、一位でアンカーにバトンがわたりました。でも、二度こけて、四位でした。とてもくやしかったです。でもみんな、大笑いできました。



小学校最後の運動会は、とても楽しくて、最高でした。

## 小学生最後の運動会

六年 前畑 あづさ

九月二十五日は、私達六年生にとつて最後で楽しい運動会だったと思います。小学生最初の種目は徒競走がありました。みんながおうえんしてくれてうれしかったです。自分なりにがんばって走れたと思います。

障害物競走では、地いきの人達とジャンケンをしました。私は、全然勝てなくて、最下位になってしまったけど、とても楽しかったです。

玉入れも、一、二個ぐらいいか入らなかったけど、がんばりました。

そして、ついに「浜の子ソーラン」をおどる時がきました。声は大きく出して、おどりはしっかり忘れずにおどることを目指しておどりました。声を出していたけど、少しはずかしくて小さくなってしまったけど、おどりは忘れずにできたし、タワーもできました。でも、楽し

かったです。小学生最後のおどりは、楽しくしめくくれたと思います。

お昼は、みんなでお弁当を食べました。私の家族はだいたいでいつも食べていました。しかも、デザートはいつもぶどうでした。私は家でつくってくれるお弁当が大好きなので、うれしかったです。

午後は、親子競技をしました。私は二回走ったけど二回とも、あめが下の方にあつて、なかなかとれませんでした。それでまっ白になったけど、とてももおもしろかったです。

四部対抗リレーは、がんばって応援しました。結果的には負けてしまったけど、楽しかったです。

小学生最後の全員リレーは、今までの成果が出たと思います。がんばれてよかったです。小学生最後の運動会は、めいっばい楽しめたと思います。次は中学生として出場だと思

けど、その時も、思いっきり楽しみたいと思います。

## 小学校最後の運動会

六年 宮 本 紫 帆

私は、今日の運動会は小学校最後の運動会でした。だから私は、少しきんちようしてました。

そして初めの競技は徒競走でした。私は一番か二番になれたらしいなと思いました。そして、ピストルの音がなり走りしました。一生けん命走りました。ゴールした時は、走りきったという気持ちでした。

次は、地区の玉入れがありました。私は一度もかごに玉を入れたことがないのでがんばろうと思いました。そして玉入れが始まりました。すると二個も入りました。すごうれしかったです。

次は障害物競走でした。私は障害物があるきょう走はすごく苦手でした。でもやってみる

とすごく楽しかったし徒競走よりも楽しいしおもしろかったです。

次は浜の子ソーランです。これまでの練習した成果が出ました。やっているととも思いきりできたのと楽しくできたことがよかったです。

次は、四部対こうりレーでした。私はぬかされたらどうしようと思っていました。一回目に走ると聞いてちゃんとパスわたりできるかなあとか、どうしようか思っていました。でもちゃんとパスわたりできました。最後の運動会はすごく楽しかったです。

### 運動会

六年 吉岡 溪心

九月二十五日に運動会がありました。

始めにラジオ体操をして、それからすぐ競技に入りました。徒競走は、ぼくが楽しみにしていた一つで、はりきっていました。

した。最初は、四レーンや三レーンの人がゆうりであきらめかけた時もあったけどがんばって走りぬけて、なんとかトップになりました。その時はすごくうれしかったです。

その後、テントでいろいろして休んでいると、すぐ障害走が来ました。最初はぼくは前に出ているかと思いましたが、最後のジャンケンのおじいさんとジャンケンのテンポがあわずにどんだん他の人にぬかれて残念でした。

それから、いままで練習してきた浜の子ソーランをしました。ぼくは真けんにかんばったけど声をわすれていたことがありました。でも最後のピラミットもできて良かったです。

これで午前は終わって、お弁当を食べました。おなかがいっぱいだったのですごくおいしかったです。

午後には、ぼくが出たのは始めは親子競技でした。親子競技では、最後のおんぶ

の時にお母さんがおんぶをして重くてつかれてしまいました。三色対抗リレーではみんないまままで練習していた成果が出てぼくたち青チームが勝ってうれしかったです。

四部対抗リレーでは、でだしはよくて、順調だったけど最後いろいろあつておしかったけどリレーは四位でした。

でも総合ではおしくも二位だったけどうれしかったです。小学校最後の運動会でも楽しかったです。これからおんぶ組みたいです。



### 健康メモ

#### インフルエンザ予防に大きな効果のあるうがい

これからインフルエンザの季節に入ります。患者の咳やくしゃみなどによって空気中にウイルスが撒き散らされ、それによって感染しますから、流行期にはなるべく人ごみの中に出ないことが大切です。ことに高齢者と幼児は要注意です。また、簡単なようですが大きな効果があるのがうがい。外から帰った時は、必ずうがいをすることにしませう。もちろん予防注射を受けること、普段から体力をつけておくことも重要です。

(枝川)



# 郷土の偉人 澤井市造翁

## 飯澤 登志朗

由良脇公園に澤井市造翁の胸像が建っている。

その傍らに、由良の歴史をさぐる会が建てた案内板には次のような内容が標されている。

「澤井市造翁は嘉永三年（一八五〇）由良で生まれる。十五歳で船乗りとなり北海道で活躍、三十歳で建設業界に入り、明治二十八年台湾へ渡り澤井組を興す。

明治四十五年（一九一二）病で倒れ六十三歳で夢多き波乱万丈の人生を閉じた。

その間、ふるさと由良を忘れることなく小学校建築、由良神社大鳥居の寄付等物心両面で多大の貢献をなした。…」

市造翁は幼くして父母と死別している。生まれてすぐ父親を亡くし母親も翁が六歳の時他界する。その後は伯母の手で養育となるが伯母は実に優しい心立

ての人で実子以上に愛情を尽くして養育された。

九歳になり当時の村医林先生の許に通学（当時小学校は未だ無い）するも豪放不埒な性質の翁は数ある先輩や友達を片っ端からいじめ、師の注意も聞かない、腕白は増長するばかりで遂に退学となる。

伯父S氏が厳しく躰けるが翁の餓鬼大将振りには治まらず、子を持つ親からは再三苦情が絶えることはなかった。

十五歳の頃当時由良港には大少数十艘の船で賑わっていた。最初はK家の船に見習いとして乗船さらに岩滝の小室家の持船（五百石積）に転乗し遠く各港々へと旅立つがその間十二年も帰村せず音信も途絶えていた。

明治十二年には北海道を航海中しけの為難波し命からがら陸地に泳ぎ着き九死に一生を得て

友人宅に身を寄せていた。

明治十四年に伯父M氏が庄内で台風により船とともに沈没したことがあったがこの訃報に接した時も帰る旅費も身の廻り品もない状況であった。

その頃世話をしてくれた人の縁で鉄道工夫に用いられ、さらに人夫供給の任に就いている。

この事が事業家としてのスタートといってもよい。

北海道夕張線の工事中、翁は馬を借り集めて材料を運んだが道が悪く仕事が捗らない、其れがもどかしく馬をビシ、撲りつけたので誰れも馬を借す者が無くなった。

また明治十七年頃に小樽で埋立工事をやってほど出来上り竣工の引渡しを済んで間もなく、大しけの為石懸けの堤防が流れることがあった。

雪の降るなか裸になって海中に飛び込み部下を指揮して自費で復旧工事を施した、これが北海道で信用を得た初めで以後段々引立てられる一因となっ

た。

その後順境と逆境を繰り返しながら明治二十一年に部下九十名余を連れて大阪へ、しかし広い大阪で何一つ仕事がなく厳しい生活を送っている。満足な食事もなく耐える日々を過していたが転機が訪れる。それは大阪鉄道の着手であった。

大阪鉄道の一部を引受けたが長い間徒食打った揚句、虎の子の財布には一日の食費にも足らぬ現金しかなかった。親切な茶屋の老父に救われ此の工事が無事十二月一杯で完成し一同目出たく二十二年新春の雑煮を食べることが出来た。

明治二十六年、翁が四十四歳の時である。事業に失敗し着のみ着のまま、知人宅で過していたが有馬組から今度敦賀で北陸線の工事をやることになった、その監督者を澤井翁に頼みたいと話があり、知人は翁が喜ぶだろうと本人に相談せず承知して引受けたが本人は出来ないと言えない返答する、原因は借金



があつて外に出られないとの事、知人が奔送して問題が解決し敦賀へ向うこととなつた。

北陸線第三号隧道工事は明治二十六年翁が有馬組へ入社して関西地方工事部長として最初の工事であつた。

明治二十八年には鉄道隊の人夫八百人を伴れて渡台することとなる。台湾での活躍は後日として再び由良との関係に戻したい。

舞鶴公園は旧城跡をそのまま公園にしたもので手入れが行き届かず荒涼たる様子であつた。

加佐郡長川本正路氏がある日翁に対し君の尽力でこの公園を体裁の好いものにしてほしいと依頼した。翁は俺は由良の者、当町には資産家も多い。その方々が寄付するなら自分も同じ金額を寄付したいと申し出たことがある。郡長の考えていた規模と翁の公園に対する考え方があまりにも桁違いの規模であつた。

明治三十八年日露戦争中に国

債の第二回目の三ヶ村に対しての割当てがあつた。当時の金額一万円であつた。村の有力者は度々会議を開き対策を検討する

も良案はなく翁に強く協力を願うこととなり面会した。翁は由良村分は三千円位として全部引

受けることを承知したが他村からクレームが付いたが最終的に申込書に押捺する。その時の模様は翁の前で村の代表者達が頭を揃えて只々頼むと平身低頭

したので流石に翁もその場で指環にはめた認印を押したとのことである。

翁は、無学を標榜していたが「習うより慣れろ」で晩年は演説は非常に上手であつたとのこと、

松原寺で弔らつた亡妻一周忌の費用を省き、それを由良小学校建築費として多額の寄付をしているが学校の落成式に臨んだときの演説は筆記されて今に残る位流暢なものであつた。後日ある人が演説の内容について尋ねたところ、自分が常々考えて

いたことと新渡戸博士の話が同じ考え方であつたので間違つていないと信じて話したものであると答えている。

明治四十四年に翁が幼少の頃養育を受けた伯母が他界した。翁は遺族や親戚へ頼み込んで費用一切を負担して盛大な葬儀を営んでいる。自分が今あることは伯母のお影と考えたのである。

翁の胸像は、先に述べた由良協公園と台湾の台北の二ヶ所にあり、いずれも翁の一周忌に建設したものである。

由良神社境内の大鳥居は澤井市良と刻まれているが狛犬が小室久米蔵、石灯籠が中西六右衛門、そして道測の石垣は澤井組の奉献である。

そして、幼少の頃養育を受けた伯母は小室久米蔵の母親であり、現在の由良小学校の敷地拡張に土地を提供したのもまた小室久米蔵で、校庭の角にその標石が建っている。

明治四十五年、翁は台湾で発

病し入院、医師や家族の手厚い看護も効なく六十三歳で永眠した。

翁の葬儀は当地で台北庁長を始め国会議員や財界人も多数出席し厳かに取り行われている。

「澤井市造翁鉄道工事年表」

- 明12～17 北海道手宮幌内間工事
- 明17～19 碓井峠入山線測量工事
- 明19～20 宇都宮白河間鉄道工事
- 明20～21 静岡掛川間鉄道工事
- 明21～23 大阪奈良間鉄道工事
- 明23～25 北海道石見沢砂川間
- 明25～26 山陽線鉄道工事
- 明26～28 北陸線敦賀福井間工事
- 明28～36 台湾鉄道総督府工事
- 明36～37 福知山舞鶴間鉄道工事
- 明37～41 大連鉄道工事
- 明41～45 台湾各種工事

(参考)

投稿するに当り山田昭氏から拝借した「澤井市造」大正四年発行(非売品) 発行者澤井組本店、代表者小室久米蔵。を参考にした。

# 海人族の由良川街道

京都丹後学会会長  
丹後ふるさと観光大使

坂本 与一郎

## 黒潮海道

古代史をひもとくと強大豪族「海部氏（丹後一の宮籠神社宮司家）」に突き当たる。丹後の古代史の中に大きな位置を占めている。

南方モンゴロイドが黒潮暖流に乗って北上、北九州から日本海に入る。海の民「宗像氏」「安曇氏」などである。彼等は、漁労や航海術にすぐれていて海流という古代のスーパーハイウェイを、大型の魚、鯨やブリなどを追い、やって来たのである。

彼等が海の民でありながら、海人族が他にはない特徴があるのは、精神的支柱に、「浦島伝説」と「羽衣伝説」を持っていたことである。

丹後地域は何処にでもこれらの伝説にかかわる神社や地名を持つている。

この伝説は、南方モンゴロイドが持っているらしい。インドネシアやフィリピンなどミクロネシア地域にあるという。

南方の伝説が唱歌「やしの実」のように日本海に入り、対馬暖流に乗って丹後にたどり着く。

冠島の北に黒い流れの帯がある。親潮（黒潮）である。“走り水”ともいう。対馬暖流が、北東へ向って流れている。

冠島が手が触れるような近さにある。舞鶴湾の入口金ヶ崎まで、対岸にはつきりと由良岳（六四〇）がそびえている。

丸木舟に乗った古代人も北前船を操った舟乗りたちも、目印

にしたのであろう。

そしてこの山のふもとに内陸へ入っていく由良川の入口、由良湊がある。

## 由良湊

「丹波高地に発する由良川は、流れ流れまた淀んで、ここ丹後由良で栗田湾に注ぐ。

ユラ（由良）はユリ・ユルの転訛【てんか】語であり、ユルとは風や浪で砂がゆり上げられ、またゆり下げられ、ゆり淀【よど】ませてより分ける意。

汽車の窓から栗田湾に注ぐ河口あたりの波の戯【たわむ】れを見てみると、まさにユラそのものである。由良の地名分布は広く、高知・鳥取・淡路島・和歌山・群馬・山形などにある。

古代から近世に至るまで、船による由良川の交通や物資輸送は、いまわれわれが想像する以上にさかんであった。近世、由

良川河口の丹後由良は、千軒長者由良の港【みなと】と謳【うた】われた。

間人【たいど】・中浜・久美浜・敦賀【つるが】から福井や金沢など、日本海沿岸の湊はもろろんのこと、遠く四国方面より回漕されてきた千石船の荷物も、由良港でおろされ、神崎で高瀬舟に積みかえて由良川を遡【さかのぼ】り、福知山の音無瀬【おとなせ】橋あたりまで運ばれた。積み荷は丹後【たんご】ちりめん・油粕・酒・材木・干し鯛【いわし】・鱈【たら】・塩などで、下りの舟にはおもに米が積まれていた。

塩といえば、由良の浜は古代から製塩のさかんな地。森鷗外『山椒大夫』で高名な安寿姫が、過酷な労働に耐えたという塩汲【しおくみ】浜も、由良の西岸に遺【のこ】っている。（創拓社刊「日本地名ルーツ辞典」

より)

「由良川の呼び名で、文献上、一番古いのは『天天河』（松尾大社文書）、次いで『大芋【おくも】川』である。大芋川は平安時代には歌枕にもなっていたようで『おくも川、荒ぶる神もなごむまで、由布取りしごえみそぎをぞする』（藻塩集）といった歌もある。また平治大嘗会【だいじょうえ】屏風絵の詞書に、この大芋川のほとりで鶴が群れとび、そこで人々が六月祓（は）らえ、川の水で身を清める）をしているとある。のどかな豊かな、また絵のような風景である。平治といえは十二世紀後半は平安末期のことである。この大芋川が、のち大雲川と表記されるようになったものだろう。いづごろから由良川といわれるようになったが、はっきりしない。」

（大江町教育委員会刊「大江ふ

るさと学」より）

ちなみに、「湊」とは、河口

に出来た港のことを云う。「津」

は、港や浜にできた港。「泊」

は長い航海の停泊地、一時的に

嵐をよけたりする。（桜井英治

（北大）市村高男（高知大）両

教授説）

由良湊は、古代から近世に至

る港としては、絶好の地であつ

たといえる。

由良川河口の対岸は、舞鶴湾

口になっている。ここは浦入火

力発電所の建設現場から、古代

の船の遺跡が発掘された。

舞鶴市の浦入遺跡で発掘され

た縄文中期の外洋大型丸木舟。

丹後ニゴレ古墳から出てくる船

形埴輪は、五十人ぐらいの人員

が乗れるという。

二百メートルぐらいの綱をつ

けた水深器が、日本海をとりま

く浴海州などからも出土する。

水深器と山並や島々を目測し

ながら航海したのであろう。（藤

田富士夫著「古代の日本海文化」

中公新書刊参照）

現在の宮津市由良は、奈良時

代から丹後国加佐郡であり、そ

れ以前の古代は丹波国凡海郷

【おおしままごう】で、冠島・

沓島を目標にたどりついた凡海

海人族が由良川をたどる内陸進

出の起点となった。

山椒大夫の荘園内になる。K

TRの駅名に「東雲【しののめ】」

がある。

「南国の海潮【うなじお】匂う、

すつきりとした地名である。

沖縄や奄美【あまみ】の島々

に伝わる古代歌謡に『おもしろさ

うし』ほぼ十三世紀から十七世

紀初めにかけて謡われたものを

集大成したもの。『おもしろ』と

は『思い』と同源で『神に申し

上げる』意で、『万葉集』にも

匹敵する貴重な文化遺産であ

石川健一によるとこの『おも

ろさうし』のなかにコイシノと

はアケシノという神名をもつノ

ロ（巫女、みこ）がでてくる。

両者に共通なシノはシノツメの

シノであろう。

アケシノといえは、明け方の

シノで、シノとは太陽のことで

あるという。

『古今集』にも『明けゆく』

にかかる枕詞としたシノ・ノ・

メがあり、それはもともと太陽

の目のことである（村山七郎）。

要するに東雲という駅名は、

単に夜明けという美称ではな

く、南方という『太陽の目』で

あり、太陽そのものことであ

る。

黒潮に乗って北上してきた南

方海人が、九州南方で対馬海流

にのりかえ、山陰の海辺から丹

後半島を回って若狭湾に入り、

ここ東雲にやってくる。海食の

激しかったその昔、現在の東雲

駅あたりまで海が迫っていたのであるろう。(日本地名ルーツ辞典) 創拓社刊より)

### 豪族海部氏

尾張海人族の祖、天香語山命(高倉下)は、由良川河口凡海由良湊に国造りの本拠地を置いた。由良湊は、大倭の中心港として日本海交流交易圏の要となった。

「漁業を中心とする海人【アマ】関係の氏族で、海部氏【アマベウジ】がある。部【ベ】として編成された海部の分布は、古代の文献などによると、太平洋沿岸では千葉県を東限とし、日本海沿岸地域では福井県(越前国坂井郡海部郷あたり)までである。

丹後には熊野の熊野郡海部郷、加佐郡の凡海【おおしあま】郷があり、与謝郡には海部直【あまべのあた】ないし海直が存

在した。『新撰姓氏録』(左京神別)には、『但馬海直』がみえ、但馬国城崎郡には海神社(式内社)が鎮座する。宮津市の籠(コ)神社は、丹後一宮の古社であり、社家蔵の海部氏古系図には、社家海部直氏の貴重な系譜が記されている

海部には安曇【あづみ】系の漁人タイプと宗像【むなかた】系の船人タイプがあったが、丹後の海部は、日本海文化圏においても重要な役割を果たした。(『京都大事典府城編』淡交社刊より)

筑紫の豪族である安曇氏は、海神の綿積【わたつみ】命を祖とする。

「海民」の研究網野善彦氏は、その著書『日本』とは何か(講談社刊)のなかで、海人族の移動・移住の河川の利用に触れている。

「当然、この逆ルートを通り、

日本海沿岸から河川を利用して内陸部に入り、太平洋側にいたる道も、古くから利用されていたであろう。もとより私のまったくの憶測でしかないが、甲斐・武蔵などにかがえる高句麗文化の影響や信濃と安曇【あづみ】氏との関係などを考える場合、こうした列島横断ルートを想定することも、荒唐無稽【こうとうむけい】とはいえないのではなからうか。実際、かなり早い時期から日本海側の産物が内陸部、太平洋側に見出される事例があることも指摘されているのである。」

河川を使って、海人族がもつとも内陸部に入っているのが、長野県西部、岐阜県に接する南安曇郡安曇村(野)である。また、「寢覚の床」のような山間の仙峡(木曾川)に浦島伝説があるのもうなずける。

「林業と観光で知られる。北アルプスの秀峰穂高【ほだか】岳があり、その真東に式内名神大社穂高神社がある。祭神の綿津見の神は水を治める神で、御船祭りには船壇尻【ふねだんじり】(山車【だし】)が曳【ひ】かれる。これは海人【あま】族の祖霊信仰であろう。アヅミは、海神【アマツミ】のことで、海人【あま】族の首長の意であり、海人族の安曇氏が土着したことによりついた地名と考えられる。応神天皇三年(五世紀)、安曇蓮【あづみむらじ】の祖大浜宿禰【すくね】は大和【やまと】朝廷の支配下にあつて海人の頭領となっている。

JR大系線沿いの姫川を遡上【そじょう】すると、糸魚川【いとがわ】を起点に千国【ちくに】に・大町・穂高神社へ出る。この道は有史以前より塩の道であり、海人族が安曇一円の地に

勢力をふるってから梓【あずさ】川などの扇状地に用水堰【せき】を縦横にめぐらし、その優れた技術を後世に伝えた。

安曇氏は朝廷に供御【くご】を司【つかさど】る膳【かしわで】氏と確執【かくしつ】に敗れ、延暦十一年（七九二）に佐渡へ流罪となり、中央政界から没落した。しかし、いまでも保高【ほうだか】・保尊【ほそん】の姓氏、海部系地名（八木・畑・和田）は連綿と受け継がれている。

穂高神社が明治十八年まで諏訪神社と称していたことは、この地が諏訪氏の勢力下にあったためとも考えられる。アツミ（アズミ）・アツミ地名は中部地方以西に多い。（『日本地名ルーツ辞典』創拓社刊より）

そして若狭湾からも海人族の内陸への旅がある。

「ところで、鴫【にお】の海

といわれる琵琶【びわ】湖の東方、鈴鹿山地からさし昇る日の出を迎える、いわゆる古代の迎日祭祀にとって、湖西に位置するヒエの峰は、まさにうってつけの場所にある。とくに湖東の名山三上【みかみ】山は、日吉大社（里宮）の後方、標高三七八メートルの神体山（山宮にあたり八王子山ともまた小比叡ともいう）の頂上にある磐境の真東に位置する。この神体山には大山咋【おおやまくい】神（松尾大社の祭神でもある）と、

その妻神である海神の姫玉依媛【たまよりひめ】の荒魂を祀【まつ】る。春分・秋分の日、太陽は三上山の山頂から姿を現し、夕浪千鳥の啼【な】く鴫の海を金色に染め、八王子山の磐境や比叡山を神々しく彩【いろど】る。この磐境のことを金【こがね】の大巖【おおいわ】という

のも領【うなず】けるのである

る。八王子山の磐境からこれを仰ぐと、これ以上に荘厳で贅沢【ぜいたく】な「日迎え」（ヒエ）の神事（日待ち）はないであろう。この神事の目的は、もちろん海のように広く大きな琵琶湖の豊漁と、その周辺平野の豊穰や鉄鉞などの富鉞の祈念であるのはいうまでもない。しかもその迎日祭祀にかかわったのは、太古の昔、琵琶湖に進出した安曇【あずみ】系海人（火明命【ほあかりのみこと】系）と推測される。火明命十八世の孫、建振熊【たけのふりくま】を祖とする和邇【わに】系海人（いま湖西に和邇という地名がある）といってもよい。

古代海人の「ヒムカエの山」比叡山は、京都盆地に住む古代人にとっても、やはりヒムカエの山であったに違いない。比叡山にさし昇った太陽は、まずその西麓【ろく】にある下鴨神

社（祭神は玉衣媛とその父、加茂建角身命【たけつぬみのみこと】）の糺【ただす】の森を照らす。このことよって糺の森の語源が「朝日の直射【たださ】す森」（略してタダスの森）といわれるゆえんであり、夏至のころの太陽が洛西松尾山（そこに松尾神社があつて大山咋命を紀る）に没するのは単なる偶然ではない。まさにそのところを得ているのである。（『日本地名ルーツ辞典』創拓社刊より）

（京都丹後学講座「小野小町丹後に隠れる「妙性寺」参照）

大和建国

ヤマト国造祖といわれる倭宿弥命の南下ルートは、舞鶴の大森神社やびわ湖東岸野洲市【やす】の三上山のふもとと御上神社の祭神になつてゐることだ。

アマテラスの孫といわれるこの命は、舞鶴生れである。別名

天御影命あまのみかげのみこととしてこれらの祭神

にまつられているのである。大

森神社を祀ったのは、丹後王国

三代目丹波道主命たにはのみちのぬしのみことであり、御

上神社では藤原王朝の二代目藤

原不比等である。

またこのルートは、ヤマトや

尾張海人族と通交ルートであつ

たのであろう。尾張海人族の祖

天香山命あめのかぐよまのみこと(高倉下たかくらし)の通つた

道でもあつたかもしれない。

丹後王国が丹波を超えて、や

まとの根幹を造つたことは間違

いあるまい。十五代応神天皇ま

で確実に丹後の血が入り、それ

以降もヤマトの関係は続き、三

輪山を中心として飛鳥の時代ま

で、そして七一三年の元明天皇

の時代大丹波王国は分国され

た。歴史からの抹殺を恐れた海

部氏は八七一年「系図」の制作

に入った。

聖徳太子が云つた「和をもつ

て尊し」、丹後・大和同盟は終

わつた。

大和純血主義を用意周到に進

めた藤原不比等によつて「平城

京」中央集権統一国家体制が誕

生する。七二四年聖武天皇即位。

古事記(七二二年) 日本書紀

(七二〇年)丹後風土記(七一三

年)が、それぞれ編さんされた

が徐々に大丹波事由が消されて

いく。

海人族の精神的支柱であつた

浦島伝説(伊勢内宮)と羽衣伝

説(伊勢外宮)とは大和の地で

祀られる。



# 川柳

坂本妙子

折込み都々逸

なつやせ

## 終章に

悔を残さぬ

努力する

な 夏の暑さに

つ 疲れた私

や やせもせんのは

せ せつないネ

こそこそと

耳へ肉緒の

曾孫来る

ふれあい

ふ ふと顔合わせ

れ 礼儀正して

あ 挨拶できる

い い、娘

ハイドには

成れぬ自分に

甘んじる

かけひき

か 片意地張って

け 喧嘩をすれば

ひ 退くに退けない

き 気の悪さ

# 敗戦後『京都』の一隅の面影

濱野路 大森 孝

(一)

その頃の彼は京都市内で、名だたるコンサートがあると、そのイベントを体験するために、遙か丹波の須知町から万難を排して会場へやってきていた。わざわざ、ご苦労なことをするねと、いぶかるむきがあるかもしれないが、彼、金加行雄氏にとっては、京都市こそが生れ故郷であり、懐かしい思い出の土地に外ならないのだ。好きな音楽に浸って、瞑想にふけても、心のびやかにストレスを解消したとしても至極当り前のことなのだから。

広島市へ赴くための道すがら。旅姿の学生の身分であった。

なぜとしもなく、「東一條」で降車。彼は私を「関西日仏学館」の方へ誘った。次から次へとくりひろげられる道を辿ると、白いやや大きな洋館が見えてきた。

学館はそんなに大きくはなかったけれども、どこか、しようしやかな上品な感じの好い建物であった。(アクセスの十分でない九条山から現地へ移されて、彼も私も外からその佇まいを窺がい知るしかなかったが、何でも会館のテラスからは、京都大学やら大文字山の眺めがすぐれて良いと言うことは聞いていた。敗戦後、うちのめされた貧困おおうべくもない。混乱の世の中で、一九四九年一際、きらっと輝いたノーベル賞受賞された「湯川秀樹」博士が、学生

の頃、当学館で学んでおられた記録が、当館備え付けのノートに残っている。そしてこと程さように京都大学の学生達が行列してならば、仏文学や仏国文化を京都に於いて学んでいた。そんな由緒ある、濃密な仏文化への入り口となっていたし、現在でもかの国の文化への懸け橋となっている。

この学館の教鞭をとっているのが、仮に「横川悠吾」氏なる大阪市の出身の人物で、高槻の大阪外事専門学校卒業の一苦学生であったとか。以下、金加君の話に依れば、「横川氏」は焼け出されて、飢えと貧苦にさいなまれ乍ら、歩き行く進駐軍兵士の靴磨きなど最底辺の手伝い職に身をやつし乍らも、不屈の目的と意思をたやすことなか。現在の教官の地位を得たとか。仏語に傾倒してこの道一筋にたゆまぬ精進で成しとげたとか。さながら、今「二宮尊徳」の話を書いている様で、大阪商人の土性骨の逞ましさに舌を

捲いた。

因みに、この頃だったか、京都大学に伊吹武彦教授が大学の内外で活躍だったと思う。仏語の翻訳された出版物で、私も仏文学へ傾注を深めて行ったと思われる。

(通りの反対側にはドイツ文化研究所?が、通の方に玄関を向けて設置されていた。関西日仏学館より少し奥まった建物だったと記憶している。)

(二)

私事で恐縮ながら、仏語を中級で、(A・ドオデ「風車小屋便り」を毎週一応第二外国語で受講している。モーパッサンの「脂肪の塊」を履修している大阪外事専門とは段ちがいであったし、東京では東京高等師範学校の生徒が千代田区神田の駿河台のアテネ・フランセで仏語を鋭意履修しているのを耳にし乍ら切歯扼腕。

それでも、「中」辞典と仏語発音の手引(松原秀治著)が双

つ支えとなつて、仏語、仏文  
化への傾注を断とうとしない。

新仏和中辞典は初版本で、戦  
前の昭和十二年四月三日発行で  
定価参円五拾銭の古いもので、  
井上源次郎女子学習院教授と田  
島清陸軍士官学校教授が共編で  
あつて、時の駐日仏国大使シャ  
レル、A、アンリー閣下に謝意  
を述べておられる。ねんごろな  
序文によせる。

今一つの仏語発音の手引も初  
版本で一九五二年七月二十五日  
の発行で、定価百五拾円の代物  
である。大切な蔵書に日が当ら  
ない。

広島高校へ、昭和二十二年に  
入学して、第二外国語を英文科  
以外で履修する…それは至難の  
業。それやこれやで、関西日仏  
学館への羨望とこだわりは必然  
のものであつた。丹精こめた割  
には合わなかつた。

## (三)

金加君に誘われて行つた「フ  
ランソワ」音楽喫茶は四条小橋

をわたつて、一段下にあつた。

彼の話では、学生とか文化人達、  
労働組合の活動家などが、  
気易く集う、さゝやかな親しみ  
のもてる喫茶店である。(三色  
旗のマッチ箱をもらった。)有  
名な女主人が客と対応している  
のだが、私はそこ迄は気づかな  
かつたが広島市の流川町の「ム  
シカ」の音楽茶房が本店である  
のにくらべると、いかにも手作  
りで家族、知人で経営している  
という感じだつた。彼はコン  
サートなどのあとで、レコード  
で心を癒すようである。同じ喫  
茶店の客でも私は平板のように  
音楽をきいているだけなので、  
金加氏の悦びの深さはない。彼  
は四条で茶をすすり乍ら、趣味  
に浸つているとも言える感触が  
あつた。

平成になつてから、この女主  
人がなくなつて、学生達や活動  
家の人々に慕われていたことを  
知つた。京都という土地柄が生  
んだこじんまりとした家庭的な  
雰囲気を感じ出す。彷彿とした

先覚的味わいと共に思い出す。

## (四)

金加氏は阪急で一緒に乗つて  
くれたが、西院を過ぎてはまだ  
降りない。桂を過ぎて、『じゃア  
ね。気をつけて!!』彼も丹波は  
須知町の宿舎へ戻らねばならぬ  
のだ。私は梅田へ出て、中央コ  
ンコースにならんで、午後九時  
の大阪発博多行き夜行に乗つ  
て、山陽線の旅が待っている。  
広島駅は本線(呉線非経由)を  
通つて、翌朝、未明すぎに着く。

去りやらぬ思いを胸に閉じこ  
めて、京都での思い入れを山陽  
路へ運んで行くのだ。仏文学や  
仏語への趣味をなймаぜにして  
かくして関西の雰囲気断つて  
二葉あき子さんのうたう「夜の  
プラットホーム」「フランチェ  
スカの鐘の音」や「あゝ広島に  
花咲けど…」。関西の雰囲気  
未練を残しながら、心をはげま  
して、彼金加氏とも訣れたので  
あつた。

二〇一一年九月二十六日 記

## 平成23年度 宮津市人権標語コンクール優秀賞

ありがとう 心にしみる 笑顔の公式

中学3年生

思いやる “やさしさ” 一さじ 仲良しスパイス

小学2年生



# 若狭越前海岸を歩く (No.8)

## 港 四 方 俊 一

朝起床午前六時、朝食の準備を始める。五月のこの時期は天候に恵まれる。朝から快晴で出発準備は順調に進む、三十分も歩いたであろうか、「帰り山観音」があつて霊水が湧いていた。勿論、医術の発達していない江戸時代のこと、観音さまの水は毎日飲むと病気の人は健康となり、健康な人はますます健康になると云われる不思議な水。全国から病気が治つたというお札の手紙も多く、その声を聞いてか、訪れる人はますます増えるばかり。今でも水を汲むのに長蛇の列が出来る。成程、早朝(七時半頃)から人の行列であつた。皆ポリタンクを持って並んでいた。私はコップの備えてある飲用の水を飲んだ。それは冷たく、スーッと喉の奥に消えた。爽やかな喉ごしであつた。敦賀街道(国道八号線)の大比田(県

道一二五線)迄約八キロ、左に青々とした敦賀湾、右手は北陸の山々、足は軽快に五幡を過ぎる。国道八号は大型車両が連続して通過する厳しい国道だ、道端の歩道部分を黙々と歩く。少し山手を見れば北陸自動車道が有り眺望の良い所である、又その附近には旧北陸線の廃線跡が有り、今は自動車一台通れる道路となつている。秋の紅葉季節は見事な景観の得られる場所として有名である。更にその東側の山中は北陸トンネルが有り、何時ぞや事故の発生したトンネルである。そして地上は木の芽峠・栃の木峠と時代の覇者が駆け抜けた峠であり、海から五キロの範囲に北陸の道脈が通っている。阿曾浦(敦賀市)に着いたのは午前九時、東は鉢伏山(七六一・八M)仰ぎ、西は敦賀湾、南を鉢伏川が流れる静か

な村であつた。江戸時代の記録に家数一〇九戸、牛三五頭、馬二〇頭有り牛馬の飼育は盛んであつたようだ。又、ミカン栽培も盛んで天明五年(一七八五)に金井源兵衛が撰津池田(現大阪府池田市)から良苗を求め植栽したものであつた。と云う訳でミカンの木も相当目につく。いよいよこゝから足は西に向い県道一二五号を歩く。直ぐ下側に河野海岸道路が通り比較的車両も少ない、一二五号線も車両は通らない、安心街道であるが大谷で国道八号線に連なり、短い隧道の連続である。大型車両の通過から身を躲し躲し歩く事は身の縮む思いであつた。再び県道一二五号に出合う大良に着いた。こゝは既に河野村である。河野村(現合併し南条町)海岸沿に足を早めた。

暫く歩くと漁村に入る、かつては海路、陸路ともに越の国の玄関口として栄えた河野村。北前船の五大船主として活躍した右近家(近江商人)の邸宅が当時の海商の豪勢な暮らしを現代に伝えている。そこで「右近家」について記してみよう。右近家は、十一代の先代まで代々権左衛門を名のり、江戸中期から明治中期にかけて大阪と蝦夷地(北海道)を結んで活躍隆盛をきわめた北前船主である。幕末には日本海五大船主「浜中八三郎(石川県塩屋) 大家七平(同瀬越) 広海二三郎(同) 馬場道久(富山県東岩瀬) 右近権左衛門(福井県河野)」であつたが銭屋五兵衛(金沢市金石)は朝鮮、樺太、ロシアとの交易から鹿児島県沖の口永良部島での対英交易、オーストラリア、タスマニア島まで数多くの交易で金沢藩を支える程であつたが河北潟の埋立事業で投毒疑惑を掛けられ、最後は捕えられて獄死した。彼等五大船主は各々の藩、村役場を支援し、地域の開発に係わつてきた。隆盛を極めた北前船も明治二十年代に入ると次第に衰えを見せ始めたが、右近家では逸早く時勢を察し蒸汽船

を導入し近代船主への脱皮に成功していた。最盛期には三十数隻の廻船を所有し、日清日露の戦役には数隻を軍用に供している。因に旅順港(中国)の入口閉塞のため広瀬中佐が乗り組み散華された福井丸は右近家の汽船の一隻である。さらに海運業を続ける一方、最も関係の深い海上保険業への進出を図り他の北前船主等と共に明治二十九年「日本海上保険株式会社」を創立した。その後昭和十九年に至り大東亜戦争下、企業合同の政府の方針に従い「日本火災保険株式会社」と対等合併して「日本火災海上保険株式会社」として現在に至っている。昔から河野村は北陸の武生(府中)と河野と敦賀と琵琶湖と京都を結ぶ海陸交通要衝として栄えてきた。後年、私はこの河野村に興味を持ち訪れること拾数回にも及んでいる。それは宮津、由良の北前船、由良川水運に関心を持ったからである。平成三年(一九九一)十月第一回「西

廻り」航路フォーラムが開催された故、報告書が届いた。何故届いたのか不明のまま、第二回から参加した。それは、越前若狭海岸の旅をしていた頃、右近家を訪問して、スケールの大きさに感服して、会合があれば是非参加させて欲しいと河野村役場の課長にお願していたから案内が届いたものと思われる。北は北海道小樽市から南は福岡市迄、博物館、日本海事史会、和船研究会、北前船主末裔、日本外洋帆走協会等々全国の関連ある機関、研究所、大学教授の参加が多かった。河野村村長故清水金二氏が北前船の河野村を売り出そうと企画したことであった。この会は五年程続いて石川県橋立町に移管されて現在迄会合研究会は続いている。さて、河野村は海岸にテトラポットを無数に敷詰めて海を埋立て漁港、公民館等の公共施設を多く設置していた。この無数のテトラポットは村の財政ではとても追い付かない。恐らく県費(原

子力発電所の交付金)で施工されたものであろう、これは高浜海岸から越前海岸迄大変な工事費用である。山裾にしがみつくように建つ漁村、旅館、学校等、厳しい環境であり僅かな傾斜地に在る農地、耕作するにも大変だ。この貧しい村が北前船に係わる人達で栄えたのは時代の流れと云えよう。そして現在は温泉と漁業による観光で往時を偲ぶ村である。右近家の前に広場が有り鉄筋の北前船が置かれている、その前に産土物兼食堂があったので遅い昼を注文した。もちろん軽食堂なので「わかめそば」を注文し一杯のコツプ酒を呷る。天候は良く、通過する車両も増えて来た。河野村営の保健センターと病院があり人の出入りも多いようだ、どうやら検診車も停車していた。連休中なのになあ?その少し前に村営の温泉が在る。結構人も多く入浴していた。私も荷物預りに荷を預け入浴とする。二階が浴場で遠く若狭湾が望まれ

た。更にその奥遠くに薄く半島が見える、あれが舞鶴市の成生岬か?いやいや丹後半島かな?と思う。隣りに入浴する地元の老人に聞くと、あれが丹後半島だと云う、そして太陽が西に沈む時、この夕陽は素晴らしいと云っていた。成程、一面の若狭湾に夕陽が映えて美しいだろうなあ...と想像した。一風呂浴びると元気が出た、日はまだまだ高い、旅をいそぐ、相変わらず右手は急傾斜地の山と崖、左は若狭湾、その間に県道三〇五号、その脇に漁村、寺、観光施設が並んでいた。そして玉川温泉、玉川洞窟があるが翌日に行くことにして国民宿舎「かれい崎荘」に一夜の宿をお世話になった。連休の割に宿泊客は少なかつたが最上の部屋をいただいた。もちろん西を望めば遥か彼方に薄く半島らしきものが見える、あれが丹後半島か?としんみりと眺めた。波は穏やか、夕陽が沈む、感動の場面であった。昼間、河野村営の温泉に入っ

たが再度宿の風呂に入浴した。疲れた身体は何度入浴しても良い。夕食は定食を頼のんだが更に一品魚を加えてもらった。もちろん贅沢は云えない、出て来たのは紋甲いかの刺身、一杯の酒が身に浸みる、感動の酒であり追加を注文した。波の音を枕に夜は更けた。午前六時、昨夜お願いしていたので早朝出発とする。無理をお願いして朝食は握り飯二個に漬物を少々、これなら歩きながらでも食事はできる。少々曇ってはいるが天候は良く爽やかであった。相い変らず右手は断崖、左手は穏やかな若狭湾であった。一〇分も歩くと茂原に着く、この地には近国海上行程として次の様に表わされている、「丹後崎（丹後半島の先端部分）三五里（一二六キロ）、若狭小浜二十里（七二キロ）敦賀立石五里（十八キロ）」と云う表示がなされていた。それは天候にもよるが百キロ米以上先の丹後半島が見えることである。丹後半島から能登、白山

が見えると云うが満更でも無い様である。海岸の僅かな浜を利用して慶長（一六〇〇年頃）から塩を生産し高佐塩として有名であったが、北前船で山口県防府市の三田尻塩が江戸末期に入るようになる。この製塩の技術は健保元年（一一一三）頃、播磨国高砂（兵庫県高砂市）から製塩技術をもつて移住して来た二四戸が当地において技術を伝えたと云われていた。越前海岸は多くの岩礁があり船の航行には厳しい所である。今はこの岩礁を利用して若い世代が潜水訓練を行っていた。世は変わるものである、二十人位の集団が数箇所をコースらしき人に従って潜水の訓練を行っていた。さて、足は順調に歩む、厨海水浴場で城山を仰ぐ、西は日本海、東は丹生山地から福井平野を望む絶好の要地（五一三米）で南部に厨峠がある、厨峠は福井平野（鯖江）に抜ける峠道で熊谷溪谷、シヤクナゲ自然園が在り人々を楽しませ

せる所でもある。更らに四キロ海岸道路を歩くと梅浦に着いた、こゝで遅い朝食を取る、この土地は、古くは海浦と云った所で国道四一七号が織田町、朝日町を通り、鯖江市国道八号線に結びつく所である。織田町と云えば戦国時代、天下統一を図ろうとして成得なかつた織田信長の先祖が生きた地である、今も織田神社として信長の資料館を有する。彼の祖先はこの地で神主をしていたと云う。その子孫が濃美（岐阜）で領主になり織田家を発展させたのであった。それには兄弟、親子越しの紛争もあつたであろう弱肉強食の時代である。足は軽快に玉川観音に向つていた。途中、温泉が数ヶ所に在り越前温泉として有名な所である、六、七軒の温泉宿が有り多くの客で賑やかな街でもある。蟹シーズンになると大変な賑わいだと云うことであつた。「玉川浦」集落より山道を二百米登った所に「六所山（六九八米）」があり急斜面で

古来より度々の地滑りがあり被害に遭つていた、剣大明神（国道三〇五号と四一七号鯖江への交差点に在り）がこの地で合戦をした時に赤血が玉になりて流れたので麓の川を玉川と云つたと伝えられていた。その玉川が海に注ぐ所に観音様が祭られている。断崖の中間の岩穴に、古へより観音の像が西向きに座している様に海から見られたのである、故にこの地を越前御崎と云い伝えられていた。昨今は新しい観音堂が建立され多くの信者が訪れている。幾くつもの洞穴を通ると左右浦、梨子平に出る、呼鳥門に着く、日本海の荒波と風が作り上げたと言われる鳥の嘴の様に見える、更に手前には鳥糞岩がある、鳥の糞で岩が白く見えるために付いた名前だと云う。呼鳥門を過ぎると、いよいよ越前村である。右は相変らず断崖で越前水仙の地、左は日本海、何も遮るもの無し、広々とした景色であつた。日本水仙の発祥地はこゝ越

廻村とか云われいる。冬海岸線を走る国道三百五号線沿いの斜面は、寒さに負けずに咲き誇る水仙が見られる事だろうなあ：と思う。少々早い。「一丁来」で昼食とする。奇岩の見られる海側を選び刺身定食の注文をした。刺身は烏賊とブリ、味噌汁は若芽にブリのアラと魚は豊富であった、昼であるが次いでに一献頂だいし、気分良好となつたので出かけた、越前水仙の里を右山手に見ながら、後日、この里へ来た時に：と先を急ぐ。三十分も歩くと「足見滝」に着く、昔から旅人達にとって安息場であつたと云う、崖から落ちる飛沫は涼を求めるのに最高であり、神仏の脚下と云う事から「足見滝」と信仰心から付けられた。村の中心部は蒲生く菜崎であり、越廼海水浴場のある所、又清水町から流込む大味川の河口部である。菜崎浦、蒲生浦は天明八年頃（一七八八）日本海で捕れる初鱈を福井藩に献上していたが甲楽城（河野村）の鯛

と引換になり中止となったとある様に昔から福井藩との連りを持っていた。大味川を渡ると福井市である。景色は断崖の傾斜が緩み海岸沿に田畑が増え始めた。小丹生、大丹生まで二十キロ余り歩いた、昼食休憩を含めて五時間、三十分間海浜に出て足を冷やす。身が引締め気持良好、三国湊迄あとわずか、頑張れと吾身を励ます。この辺りは対馬海流が直接に越前岬に当る所で断層崖と海岸段丘地形が発達している。恐らく大陸から、朝鮮半島から多くの人々が対馬海流に乗って越前岬に到達したのであろう、故に古くから八俣の大蛇退治の伝説（仏教により伝わる）もある所である。又、この辺は早咲き水仙のある所、昭和二九年に県の花に指定された。この花には悲しい伝説がある。兄弟の愛の板ばさみになり苦しんだ娘がついに身を海に投じてしまった。その翌年どこからともなく流れついた球根からこの可憐な水仙の花が咲いたと

いう。水上勉の「水仙」はこの花を京へ売りにゆく娘の物語である。大丹生から四キロ米も歩くと鮎川に至る。越前加賀海岸国立公園に含まれる海水浴場で海水の透明度抜群の海岸は砂浜有り、岩場有り、釣りやワインドサーフィン、スキューバダイビングにも適した浜である。又、鮎川公園にはキャンプ地も有りこの連休中は大変に賑わっていた。



### お詫び

前回配布致しました「公民館だより」NO一四二号の文中、栗田中学校校長嶋崎幹朗と記載しましたが、正しくは「嶋崎幹朗」様です。訂正してお詫びいたします。

ちーと知っ得

上田三四二歌碑

由良地区公民館駐車場に歌碑が建っている。

上田三四二先生は兵庫県小野市の出身で歌人として受賞歴がある。日本芸術院賞、紫綬褒章、川端康成文学賞等多数あり、また一九七八〜八四年まで宮中歌会始選者を務められている。

「うつしみはいのち養ふ吹く風も海こえてふく由良浜こころは」  
歌碑に刻まれた歌は当時この場所にあった京都府立健康教育研修所滞在中に詠まれた歌である。

なお、この碑は平成三年に中西夏江さんが寄贈されたものである。

(飯澤登志朗)



編集後記

2011 (H23) 10月

九月になっても残暑が続いた。仲秋の名月を久しぶりに鑑賞できたが昼間の暑さは残っていた。半ばになっても涼しくならなかったが、台風十五号が暑気を一気に払ってくれた。その後朝晩過ごしやすくなり、運動会も盛況のうちは無事に終了した。昨年今年と二年続きで酷暑が続いたから来年も覚悟しよう。ゲリラ豪雨も来る。電力会社の呼び掛けに応じ拙宅も参加、設定温度変更や扇風機の活躍で対前年度比78.8%を達成、節電に自信がついた。

これら秋本番、公民館には文豪の名作がたくさんあります。秋の夜長を讀書、というのも一考です。

ぜひ、公民館のご利用を。

(枝川)

